

# CULIB NEWS

## 「図書とのかかわり」

中京大学図書館長 檜山 幸夫

現在の名古屋図書館の建っている所に、かつて旧図書館本館があった。開架式図書を持つ一般閲覧室のある3階から螺旋階段を降りていくと、閉架式の書庫に入ることが出来た。そこには特異な空間が広がっていた。所狭しと並ぶ書棚の一角に、机と椅子とコピー機が置いてあった。研究をするには十分な環境だ。多くの書籍を自由に棚から取り出し、必要な箇所を探し出して付箋を貼り、それを纏めてコピーするといった基礎的な作業が出来るようにになっていた。たまに図書を探しに来る図書館職員以外には、殆ど人に出会うことがない。だから、図書との会話が楽しめた。

書棚に並んでいる本が語りかけてきたり、逆にその本に語りかけたりする。書名や論文のタイトルに困っている時など、ヒントを与えてくれることもあった。自分の専門分野ではない領域の文献を手にとったり、背表紙のタイトルを眺めたりすることにより、思考の範囲が拡大することを実感させてくれたりもした。

閲覧室で本を借り出すという非効率的な方法より、格段のスピードで仕事を進めることが出来るのが、閉架式書庫の利用法でもある。もっとも、これは大規模な図書館では困難であり、さらに電動式書庫を導入した図書館では難しくなってきた。しかし、なんとなく人間臭い、前近代的な手法も決して悪くはない。単なる懐古主義的発想で言うのではない。

近年気になるのは、急速に普及してきているデジタル化の検索方法だ。勿論、その原理は図書カードと同じで、単に検索の仕方が電子化されただけだ。極めて効率的で確実に探している本を手にとることが出来るメリットがある。だが、そこで提供されて

いる図書情報は、基本的に図書カードに記載されていたものでしかないことから、質的に向上したというものではない。書店で書棚に並ぶ本から目指すものを探す方法から、アマゾンなどを通じて現物を見ずにピンポイントに本を手にするという方法と同じである。

これは、情報という観点からすると、図書カードというアナログからデジタル化への転換を意味するだけのように思われるが、実はもっと違った負の側面があることに注意すべきであろう。それは、本を探すという動作の中で、「排除の論理」が働くことだ。見つからないということが、即、無いという結論に達するという落とし穴があるからで、近年の学生の返答に顕著に見られる傾向でもある。当該の情報が無いということと、そのものが無いということは一致しないという理解が出来ていない。

本を探すという行為には、特定した本を探すだけではなく、もっと漠然とした、その答えを導くのに関係した、又は参考になる本を探すという行為もある。その時に、図書カードも、電子式検索法も全く無力である。限られた情報が全てであるというところでは、ある課題に関する文献を探すのは不可能だからだ。学問の高度化と細分化の結果、多くの新分野が生まれ、複合領域が大幅に増えてきた。それ故、漠然としたものに対する検索という考え方が必要になる。

私は若い研究者はもとより学生に対しても、書店か古書店へ行き、無駄な時間を費やすことを勧めている。学問をするのに、無駄を惜しむべきではない。効率的とは、豊かさを失わせ面白さを消し去るような気がする。

## CULIB HISTORY

# 「クリブヒストリー」

## — 図書館の過去・現在・未来 —

## 第6章

## 誕生期から成長期へ（1969年～）

中京大学は昭和31（1956）年に開学した。スタート時点では商学部のみだった。学生数は237人。開学に伴い図書館に相当する図書室も整備されたが、学部・大学院が増設され、学生数が年々増加し、手狭になってきたことから、独立棟の建設が喫緊の課題として浮上してきた。そして、開学から13年後の昭和44（1969）年、待望の図書館が誕生した。現在の名古屋図書館の前身にあたる旧図書館本館（正式名称は中京大学附属図書館）である。学生数は開学当時の約20倍にあたる5,204人となっていた。今回のシリーズでは、この旧本館誕生の様子から、法学部棟に法学文献センターが開設されるまでの経緯を追う。

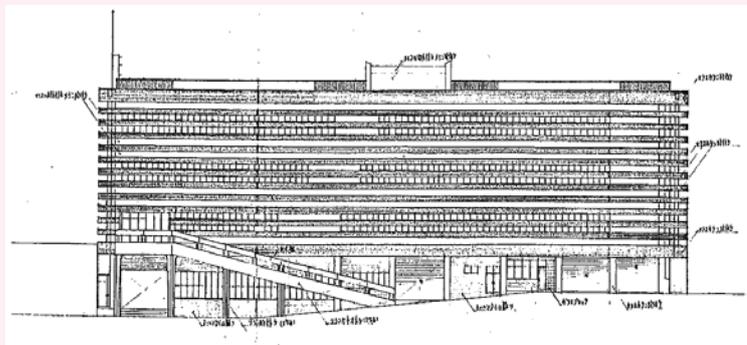
## 第1節 旧図書館本館の開館

旧本館は、名古屋校地の敷地の東端に建設された。大学はすでに大きく変貌を遂げていた。商学部（商学科と経営学科の2学科）に加え、体育学部（体育学科、健康教育学科と武道学科の3学科）、文学部（国文学科、英文学科、心理学科の3学科）、法学部（法律学科の1学科）が増設され4学部9学科体制。さらに、この年には大学院も開設され、商学研究科（商学専攻）が設置された。

建物は4階建てだった。外観は正倉院の校倉造をイメージしたものであった。これは、当時の梅村清明理事長の並々ならぬ気持ちの表れと言っていいだろう。奈良・東大寺にある正倉院は、東大寺の宝物殿である。同じ意味合いで、旧本館は中京大学の宝物殿的な存在だった。



▲校倉造の旧図書館本館



▲旧図書館の断面図

## CULIB HISTORY

建物の中心はもちろん図書館だったが、1階には学生食堂、売店（文房具と本）、床屋が置かれた。2階と3階が図書館。4階には研究所が置かれた。学生食堂は校地中央の3号館地下に1つあったが、学生数の増加で、いつも満員状況であったこともあり、この建物の1階にも増設されたのである。

2階にある図書館の入口（左ページにある断面図左端）までは、建物の外側につけられた段差の低い長い階段（断面図左側下）を登って入るのだが、神殿に上がっていくようなこの階段はあまり好評ではなかった。階段の段差はわずか10センチ、奥行きは1メートル近くあり、途中踊り場があるものの30段を超えていた。なかなか歩幅が合わず、上がるのには歩幅を少し狭くして小刻みに上らなければならなかった。

入口前は広い踊り場になっていて、エントランスを入ると立派な石で作成された壁画が待っていた。右側には学生用のロッカー室があり（後に新聞雑誌ブラウジングコーナーになる）、荷物を置いておくことができた。その向かいは事務室になっていて、受付カウンターがあった。受付カウンターでは、職員が入館する学生の学生証を確認して入館を許可していた。許可を受けエントランスホールを進むと3階に上がる階段があり、それを上がると閲覧室に入ることができた。



▲旧本館 2階にある受付カウンター

3階閲覧室には閲覧カウンターがあり、閲覧ホールには当時、目録カードの収められたカードボックスが所狭しとばかりに置かれていた。

閲覧室は、図書を直接手に取って利用できる開架閲覧室と、自学自習を目的とした一般閲覧室の2部屋が作られた。

開架閲覧室は120席。広めの机が配置され、百科事典や辞書などの参考図書、それに専門図書を配架し、利用に供していた。一般閲覧室は314席。8人用の机に仕切を付け蛍光灯が設置された座席で、学習に集中ができるよう工夫されていた。さらに窓側には、窓に沿って50席ほどの机が設置されていた。当時の学生数は5204人。その学生たちが利用するのに十分な座席が用意されていた。

当時、文部省（現在の文科省）から学部設置の認可を受けるには条件があった。その学部の専門図書や一般教養書の収蔵冊数が規定されており、認可を受け得る図書を購入して登録する必要があった。商学部のみでスタートしたときの図書室（約1万冊）に比べると、4学部と大学院を擁する規模になっ

## CULIB HISTORY

た本学の蔵書数は、約75,000冊と7倍以上に膨れ上がっていた。旧本館の完成によって、「蔵書を収蔵しきれなくなる」という当面の危機は回避することができた。

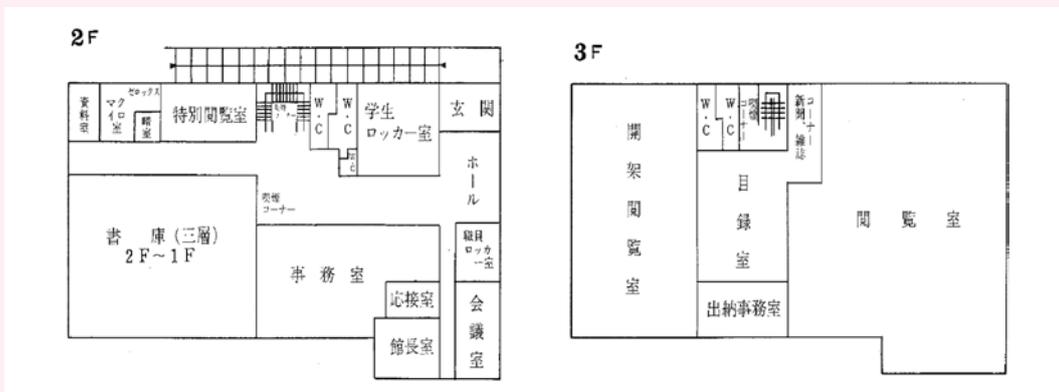


▲開架閲覧室には120席が用意されていた



▲閲覧カウンターの受付風景

当時の図書館の簡易配置図を以下に示す。2階に入口、ホール、事務室、書庫、3階に閲覧室と閲覧カウンターが配置された。書庫は1階から2階に3層式の固定書庫となっていた。



### 第2節 旧図書館本館を支えた人々

図書の増加に伴い、図書館職員も増強しなければならない。旧本館完成当初の職員の構成は、館長1人、事務長1人、課長2人、司書資格を待った職員は男性が2人、女性が4人だった。館長を除く実質9人で、図書館の主たる業務である発注受入（受入業務）、登録整理装備（整理業務）、配架出納（閲覧業務）を担っていた。

図書の発注と購入した図書の受入を担う受入業務と、それらの図書を主題ごとに分類し、登録番号や請求記号を付与する整理業務。それを5人の職員で分担していた。

図書の購入は、図書委員会（4つの学部から選出された8人の図書委員と図書館長、事務長の10人で構成される委員会）で選書決定された図書を、書店に発注していた。「本を注文する」と言うと、非常に簡単な仕事に感じるが、各学部に分けられた図書購入予算があり、その範囲内で、計画的に図

## CULIB HISTORY

書を購入しなければならない。

受入業務は、購入した図書に「中京大学の図書である」ことを証明する蔵書印や小口印（図書の上の部分に押す印）を押印することから始まった。さらに、購入した図書の順番に番号を付し、図書登録台帳に著者名、書名、購入先、購入金額を記載する。

「中京大学図書館蔵書」と書かれた登録印にその番号を押印した図書は、整理業務を担当する職員に渡された。整理業務の職員は、日本十進分類法（NDC）に従って、その図書の内容を確認して分類し、請求記号を決め、図書カードの作成をした。

整理業務の主たる仕事の図書カードの作成は、図書館業務の中でも最も重要な仕事だった。現在の図書館利用者は、パソコンやスマホなどで本学図書館ホームページにアクセスして書名や著者名で検索すれば、その図書の所在を知り利用できるようになっている。だが、当時はコンピュータなどなく、手書きで図書カードを作成していたのである。

手書きで作成した図書カードは、カードボックスに配列するが、これがまた大変な重労働だった。カードボックスには、請求番号順、書名順、著者名順の3種類があった。

請求番号順のボックスには、分類された番号順に一つの図書に対して図書カード1枚を配列するが、書名順や著者名順のボックスにカードを配列する作業は複雑だった。一口に「書名」と言っても、図書によってはシリーズ名があり、個々の書名がある図書、副書名や別書名のある図書、他の言語の書名のある図書など様々だ。「著者名」では、共著者名が何人もいる図書があったりした。このような場合、その異なる書名や著者名について、それぞれ別々のカードを作成していた。つまり、書名や著者名カードに関しては、一冊の図書に対して2枚3枚のカードを用意しなければならなかったのである。

図書カードの大きさは、縦7cm、横13cm。これよりも少し大きめのカーボン紙の付いた用紙があり、それに日本語であれば手書き（後に和文タイプライター、印刷委託に変わるが）、洋書であれば英文タイプライターを使って図書カードを作成する。その後、カーボン紙を切り離して、図書カード専用の印刷機（輪転機）に装着して、無地（白紙）の図書カードをセットして手で回転（後に電動となるが）させて必要枚数を印刷していた。

今では、図書カードを作成する必要がない。カードをカードボックスに配列することもない。インターネットを利用して、国立情報学研究所（NII）などのデータベースを検索し、ヒットすれば請求記号などもNDCを利用しなくても決定できる。図書のデータ（書名や著者名、出版社や出版年、図書の大きさやページ数など）を作成するには、本学図書館システムで決められた項目ごとに入力すればいい。データを登録することで本学図書館データベースは構築される。

ずいぶんと簡素化されたものである。図書館の業務の中で最も重要とされていた整理業務は大きく発展を遂げたといえるだろう。

それに比べて閲覧業務は、あまり大きくは変化していない。当時からあった請求カードに利用したい図書の情報を記入して、閲覧カウンターに出して出納する業務は今でもある。本学図書館では自動化書庫の設置によりその出納部分は改良されてはいるが、いまだにこの出納業務は残っている。

ただ、利用者にとっては非常に便利になったことは間違いない。当時はカードボックスから読みたい図書を探し出したが、現在ではパソコンで検索することに代わった。また、本学図書館のデータだ

## CULIB HISTORY

けではなく、インターネットを利用して日本中、いや世界中の図書や雑誌のデータを検索できるようになった。電子ブックや電子ジャーナルなどを利用すれば、すぐにその目次や内容をパソコンで読むことができるようになった。当時からすれば、考えられないことである。

利用者から出納依頼があれば、図書館職員はその請求カードを持って書庫の中を走り回り、できるだけ早く利用者に提供するように努力していた。涙ぐましい業務だったが、それが図書館の仕事だった。激務をこなす当時の図書館職員の姿が目には浮かんでくるようだ。

### 第3節 大学の成長とともに

昭和44（1969）年に日本館が完成したものの、大学はその後も成長し続けた。完成してわずか2年後には、豊田に体育学部が移転するとともに豊田分館を設置した。この時、文学研究科心理学専攻と商学研究科に博士課程が設置された。その2年後には、文学研究科に国文学専攻、さらに次の年には体育学研究科体育学専攻が設置された。その後も、ほぼ1、2年おきに大学院の充実が図られ、昭和61（1986）年には豊田に2つ目の学部となる社会学部を設置した。この時、現在の豊田図書館が誕生している。

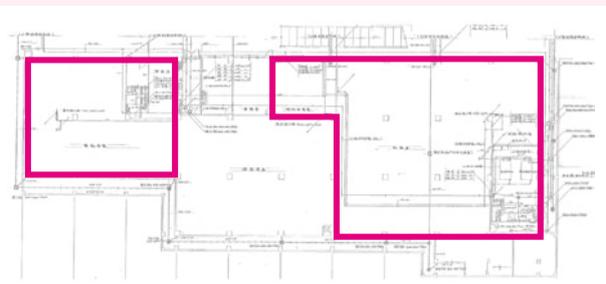
旧本館も変化した。建設当初、学生食堂や研究室を併設していたが、大学の充実発展とともに昭和58（1983）年に学生食堂を取り壊し、2層式で当時最新だった電動集密書架26連を設置した閉架書庫を増設した。これは、大学の学部や大学院の増設に伴う図書の充実に起因している。毎年1万冊を超える図書の増加にそれまでの書架では収蔵することができなくなり、書庫の拡充が必要となったからだ。

旧本館の完成当時の書庫の収蔵能力は約30万冊だったが、完成から10年を経たころには、収蔵数は約40万冊となり、収蔵能力を超えた。そのため書庫の壁面に簡易シェルビー（書架）を置いてしのぐ有様だった。「この状況が続けば書庫が利用できなくなる（まともに歩けなくなる）」。学生食堂を廃止して、書庫へと改築した結果、図書館の収蔵能力は、約80万冊と大幅に上がった。

この間、昭和51（1976）年には、法学研究科法律学専攻が、その2年後には、心理学専攻と法律学専攻に博士課程が設置された。それに先立つ昭和48（1973）年には、現在の「校地Ⅱ」に法学部棟が完成している。この時、法学部棟に図書館が建設されなかったことは後に大きな課題となる。



▲昭和43年完成当時の1階書庫  
（枠部分の右側は学生食堂、左側は売店と床屋）



▲昭和57年の改築図  
（枠部分が電動書架を設置した新書庫部分）

## CULIB HISTORY

法学部棟には、法学部と大学院の学生が授業を受講するための教室棟と法学部教員の研究棟とが作られた。図書館は「校地Ⅰ」にある旧図書館本館を利用した。これは、法学部や大学院の学生・教員にとって非常に不便だった。緩和策として、法学部棟には法学部研究センターが作られ、そこに法学部関連の雑誌と少しの図書が置かれた。

その後、昭和60（1985）年には、法学部売店だった13号館1階に法学部分室を設置し、本館にあった法学関連の製本雑誌と参考図書を移した。大学は昭和62（1987）年に経済学部を増設。元号が昭和から平成に変わり、平成2（1990）年には豊田校舎に情報科学部情報科学科と認知科学科、さらに社会学研究科も増設した。その翌年には、名古屋校舎の商学部を改組して商学部経営学科を経営学部として独立、同時に経済学研究科を増設した。

大学の成長に並行して、図書館の蔵書は増加の一途をたどり、再び収蔵能力に限界が見えてきた。そんな時、校地Ⅱの法学部棟に法学専門の図書館を建設する話が上がり、平成5（1993）年に現在の法学文献センター（LLC）が建設された。このことは、旧図書館本館にとっても大きな救いの手となった。法学関連図書全て（一般教養の法律書は除く）をこの法学文献センターに移管することとなったからである。



▲完成した法学部棟（グラウンドから）

移管資料の数は約5万冊にのぼった。その結果、旧本館の書庫は一息つくことができた。しかし、それもつかの間のこと。旧本館では、開架閲覧室のスペースの狭さが浮き彫りになってきた。学部や大学院を増設したことで、学生数が名古屋校地だけでも8,000人を超えるようになったからだ。当然、図書館の座席数も不足する。

図書館内はもちろん、大学全体の中でも問題を指摘されるようになった。そんな時に、大学開学40周年事業として立ち上がったのが、現在のセンタービルの建設であった。平成7（1995）年のことである。

建設の経緯については、「クリブヒストリー第4回」で紹介したとおりだが、センタービルにライブラリーサービスセンター（LSC）が開設されたことで、旧本館（現・名古屋図書館）と豊田図書館、法学文献センターと、現在の図書館4館体制の基礎が固まった。（続く）

（名古屋図書館参事 加藤 恭輔）



『感情：人を動かしている  
適応プログラム』

戸田 正直

東京大学出版会

感情とは何か。なぜヒトには一見すると非合理的な感情なるものが備わっているのか。本書は、「アージ理論」を提唱し、独自の視点から人間、行動、感情、環境、社会、進化、それらの関わりを緻密に紐解いていった認知科学者・戸田正直による一冊である。

生命の危険が高い野生環境の分析に始まり、感情と行動の関係、現代社会の複雑さと生きづらさの問題にいたるまで、ヒトが生きている世界を見据えた議論が躍動感高く展開される様は、認知科学者として驚嘆の念を禁じ得ない。しかし本書では「恋」「食欲」など一般の読者にとっても身近な話題が具体例として取り上げられている。専門家でなくても戸田の天才性の一端に触れることができるに違いない。ぜひ本書を通して、学問の本当の面白さを味わって欲しい。

心理学部 准教授 高橋 康介



『ザ・フィフティーズ』

デイヴィッド・ハルバースタム

ちくま文庫

第二次世界大戦後、アメリカが最も輝いていた時代。本書は、著名なジャーナリストが1950年代のアメリカを描いたノンフィクションです。東西冷戦を反映して軍事や政治にも多くのページが割かれますが、何といても最大の魅力は当時のアメリカ社会の変化を描写しているところ。今日、私たちのライフスタイルの一部にもなっている郊外住宅、マイカー、テレビのエンタメ、ディスカウントショップ（ただしショッピングモールの普及は1960年代）、ファストフード、ロックや性の大衆文化など、いずれも1950年代アメリカの産物だったことが分かります。人種問題のように、歴史に根ざす影の部分もありましたが、その点も含めて現代史の原点を知るための最良の手引きです。新旧二つの翻訳が出ているので、読み比べてみるのも一興です。

経済学部 教授 椿 建也

書籍紹介 先生編



『強父論』

阿川 佐和子

文藝春秋

最近「亭主関白」という言葉を聞かなくなった。本書には、それ以上の絶対的な夫、父親が描かれている。タイトルの「強父」はもちろん「恐父」だ。「なにが言いたいんだ、お前は。さっぱりわからん。結論から言え、結論から！」は、著者が幼稚園のときに父から浴びせかけられた言葉。中学生のときには「子供に人権はないと思え。文句があるなら出ていけ。のたれ死のうが女郎屋へ行こうが、俺の知ったこっちゃない」と怒鳴られる。しかし、「恐父」談だけではない。誕生日プレゼントに耳かきをあげて喜ばれるエピソードや、娘の献身的な介護の様子、大学で学ぶべきこと、優しい母親の姿などにも及ぶ。著者は、テレビ番組の司会やエッセイストとして知られている阿川佐和子。父は、作家の阿川弘之。父が没したおよそ一年後の2016年7月に上梓。

文学部 准教授 中川 豊



『リハビリの夜』

熊谷 晋一郎

医学書院

アスリートは、自身の身体の動きをイメージしながら練習することがしばしばある。しかし、このイメージを言語化しようとする、それが非常に困難なことを思い知らされる。実は近年、この自身の動きの言語化能力はトップアスリートが共通にもつメタ認知能力の一つであることが分かってきた。

では、どうしたらその能力を身につけてトップアスリートに近づけるだろうか。ここに一つの手本がある。アスリートとは真逆の脳性麻痺患者で身体の動きが不自由な研究者が著した本だ。著者は、思い通りに動かせない自身の動きを、イメージから見つめる内部の視点と研究者の外部の視点を上手く使い分け、生き生きと克明に記述してみせた。通常、アスリートは優れた動きを手本とするが、時には視点を変えてみよう。この本には、そのヒントが所々にちりばめられている。

スポーツ科学部 教授 山田 憲政



『書く力  
私たちはこうして文章を磨いた』  
池上 彰・竹内 政明  
朝日新聞出版

文章を書く時、「何をどのように書こう」と悩んだ人は多いのではないだろうか。この本は、そんな人達に優しく手を差し伸べてくれる。分かりやすい解説と切り口で幅広い世代から定評のあるジャーナリストの池上彰さん。そして、読売新聞の一面コラム「編集手帳」を16年間担当した論説委員の竹内政明さんが、豊富な知識に基に、どのように「書く力」を磨いてきたのかを惜しみなく対談形式で披露してくれている。

4章からなっており、文章構成の秘密や表現の仕方に至るまで、お互いの記事や古今東西の書物から、名文悪文を取りだし分析している。入門的ながら専門性も秘めており親切である。日本語は難しいと言われるが、なに難しく考えることはない。本書を読めば作文の魅力が分かり、どんどん文章が書きたくなるからだ。  
経済学部 3年 瀧本 直樹



『アスリートの科学  
スポーツ遺伝子は勝者を決めるか?』  
デイヴィット・エプスタイン  
早川書房

テレビで見る、トップアスリート。彼らの素晴らしいパフォーマンスは努力の成果なのだろうか、それとも持って生まれた才能なのだろうか。

「1万時間の法則」というものがある。これは、1万時間以上の計画的な練習を行えば、どのような分野でもプロになれるという法則だ。著者は、プロゴルファーを目指して、実際に1万時間の練習を目標に掲げている人が、練習時間に比例して腕前が上達していくのかどうかを検証している。

その一方で、その競技に向いている人の特性を遺伝子検査で解明する方法も紹介し、「持って生まれた才能」もトップアスリートになる条件ではないかと分析している。他にも様々な視点から、アスリート誕生の秘密に迫っており、読む人のスポーツ観を変えてくれる。新しいスポーツの楽しさを教えてくれる1冊である。

スポーツ科学部 3年 富田 繁

## 書籍紹介 学生編



『がらくた屋と月の夜話』  
谷 瑞恵  
幻冬舎文庫

この作品は、仕事、恋など人生にうまくいっていない主人公がガラクタを売っている老人と出会い、それぞれのガラクタが語る物語にふれていながら、大切なもの、人生の落とし物を探していく物語です。

百年前のタイムテーブルや壊れた椅子、レースの端切れ。これらのガラクタが語る物語は、忘れかけていた大切なことに気づかせられたり、生き方のヒントをくれたりします。私はこの本から、人生に迷ったときはとてあえず何も考えず、タイムテーブル(=道筋)に沿って決められた行き先に向かっていけばいいこと、いつかは自分の進むべき道がみえてくることを教えられました。

不思議な雰囲気だけど読みやすく、心が温かくなります。この本とともに、見落としかけていた大切なもの、人生の落とし物を探しに行きませんか?

心理学部 3年 西川 琴実



『子どもの本と〈食〉  
物語の新しい食べ方』  
川端 有子・西村 醇子  
玉川大学出版部

子どもの本には食べ物が登場するものが数多くある。自分が幼い時に読んでいた本に、食べ物が出てきたという方も少なくはないだろう。「食」は子どもの本と深い関わりがあるのだ。

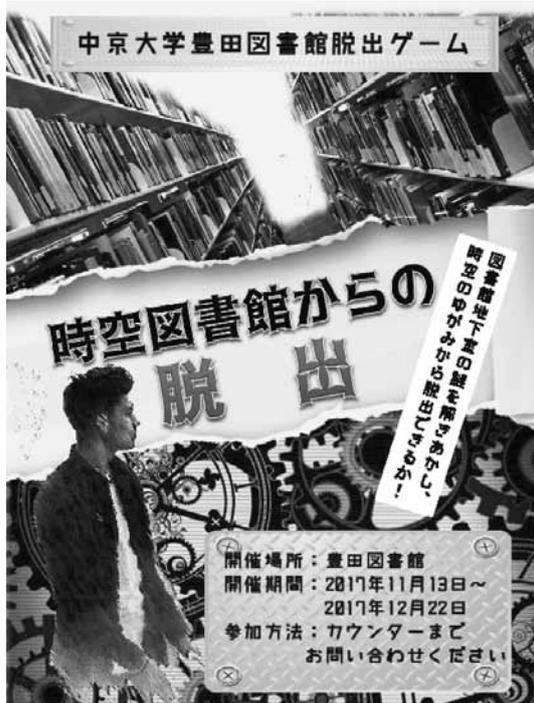
本書は、なぜ子どもの本にこれほど「食」が取り上げられるのかということとを考察し、子どもにとっての「食」の在り方の変化を辿るものである。誰もが知っている有名どころの作品から、「食」のイメージが強くない作品まで、多数の作品を例に挙げ考察している。本書を読んで、幼いころから慣れ親しんでいた作品を読み直せば、新たな視点を得るきっかけになるのではないだろうか。

巻末には筆者の「お奨め独断ブックリスト」なるものが掲載されており、「遊びと食」「飢餓と飽食」などの10のカテゴリーごとに選んだ本が紹介されている。気になった本を手にとってみるのもいいだろう。

文学部 3年 山本 璃子

EVENT  
REPORT

## 豊田図書館で館内ゲーム第2弾！ 「時空図書館からの脱出」ゲームを開催



豊田図書館では、図書館初の試みとなる館内イベントとして、“リアル謎解きゲーム「怪盗トランプからの挑戦状！」”を実施した（昨年4月6日～5月19日：前号で詳細報告済）。

今回はその第2弾として、“時空図書館からの脱出”と称して館内脱出ゲームを開催、期間は11月13日から12月22日の間で実施した。人工知能（AI）の影響により時間のループ（輪）が出来て、時間が繰り返される状態になったという仮想の下、時間のループからの脱出を図るゲームだ。

この館内ゲーム開催の主旨としては、図書館への理解と、特に書庫に関しての学生の知識と関心を深めてもらうことが狙いである。今回は前回と異なり脱出ゲームということで、制限時間を設けて問題を解決し、その結果脱出成功か

脱出失敗かを決定する。参加者は、カウンターでストーリー仕立ての「脱出ゲーム冊子」を受取り、ipadの動画を確認する。これに従い、書庫で時間制限内にクイズ形式の謎解きに挑戦し、解答を提出する流れとなる（詳細手順は下記参照）。

### 【ゲームの詳細】

- ①参加者は図書館カウンターで、脱出ゲーム専用の冊子を受け取る。
- ②ストーリーのオープニング動画をipadで見ってから、ゲーム開始となる。
- ③スマホで書庫の入口に掲示してあるQRコードを読み込むと、解答専用のWebページにとぶ。そこから30分タイムアウト制でゲームがスタートする。  
謎解き開始 → 謎が解ければ脱出完了となる。  
(基本的に書庫からの脱出がメインコンセプトとなる)
- ④正解者にはfacebookページに掲載されているアナザーストーリーの動画を案内（Webページにリンクが出てくる）。
- ⑤脱出成功者には賞品をプレゼント。

前回の館内イベント同様に今回も学生の協力を得ての実施となった。これは図書館における“学生協働”の一環であり、彼らが「自発的・自律的に学修支援に関与し図書館スタッフの一員としての働きをする」ことに繋がる。その目的としては、図書館利用の理解を深める、他者とのコミュニケーションや自主的な行動を促す、さらには自身のキャリア形成支援の一助となることが挙げられる。今回は、ゲームの問題作成（現代社会学部）、Web ページの開発・QR コード作成（工学研究科情報工学専攻）、オープニングで見せる iPad 動画作成（工学部）を依頼し協力してもらっている。

今後も図書館主催イベントにおいては“学生協働”を基軸として、より多くの在学生とともに、ラーニング・スクエア企画をはじめとする各種イベントに取り組んでいきたい。

今回は約40名が参加し、正解者は30名程度であった（正解者には『アンキスナップ』等を贈呈）。

図書館においてゲーム感覚のイベントを実施するのは昨年度からの試みであり、当初は学生の参加状況も含めた反応がやや不安視されていた。しかしながら、SNS 等での告知を強化することにより予想以上の反応があり、カウンターでの問合せも増大し、多くの参加者へと繋がっていった。



▲参加学生は iPad を確認→



▲QR コードを読み込む✓



▲謎解き開始→



▲解除コードを入力

# 2018年度 図書館カレンダー

図書館の一年間の開館予定がご覧になれます。

各館ごとの臨時休館、開館時間の変更等は、図書館ホームページの【ニュース】でご案内いたします。

## ◎通常の開館時間

	名古屋図書館 (NL)	ライブラリーサービスセンター (LSC)	法学文献センター (LLC)	豊田図書館 (TL)
平日	9:00～22:00 (中京大学の教職員証・学生証をお持ちでない方は下記時間内に入館して下さい 平日9:00～19:00、土曜日9:00～15:00)	9:00～20:00	9:00～19:00	9:00～20:30
土曜日		9:00～12:30	9:00～12:30	9:00～17:30

## ◎日付の色について

無印は通常開館日 (開講期)

○は休講期 (全館 平日9:00～17:00、土曜日9:00～12:30)

■は休館日 ※7/15・7/16 NL、9/16 TL は学内行事開催に伴い公開 (9:00～16:00)

●は定期試験月の休日開館日 (10:00～17:00)

ラーニング・スクエア (名古屋図書館・豊田図書館)  
イベント開催期間 5/21 (月)～6/29 (金) 平日

名古屋図書館 (NL)							ライブラリーサービスセンター (LSC)							法学文献センター (LLC)							豊田図書館 (TL)						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	②	③	④	5	6	7	1	②	③	④	5	6	7	1	②	③	④	5	6	7	1	②	③	④	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30						29	30						29	30						29	30					
		1	2	3	4	5			1	2	3	4	5			1	2	3	4	5			1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12	6	7	8	9	10	11	12	6	7	8	9	10	11	12	6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31			27	28	29	30	31			27	28	29	30	31			27	28	29	30	31		
				1	2						1	2						1	2						1	2	
3	4	5	6	7	8	9	3	4	5	6	7	8	9	3	4	5	6	7	8	9	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	10	11	12	13	14	15	16	10	11	12	13	14	15	16	10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23	17	18	19	20	21	22	23	17	18	19	20	21	22	23	17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30	24	25	26	27	28	29	30
1	2	3	4	5	6	7	①	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	⑧	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	⑮	⑯	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	⑳	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					㉑	30	31					29	30	31					29	30	31				
			①	②	③	4				①	②	③	4				①	②	③	4				①	②	③	4
5	⑥	⑦	⑧	⑨	10	11	5	⑥	⑦	⑧	⑨	10	11	5	⑥	⑦	⑧	⑨	10	11	5	⑥	⑦	⑧	⑨	10	11
12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18	12	13	14	15	16	17	18
19	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	19	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	19	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	19	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕
26	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	26	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	26	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	26	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕
						①							①												①		
2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
9	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	9	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	9	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	9	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
16	17	⑱	⑲	⑳	21	22	16	17	⑱	⑲	⑳	21	22	16	17	⑱	⑲	⑳	21	22	16	17	⑱	⑲	⑳	21	22
23	24	25	26	27	28	29	23	24	25	26	27	28	29	23	24	25	26	27	28	29	23	24	25	26	27	28	29
30							30							30							30						

発行 中京大学図書館

〒466-8666 名古屋市長和区八事本町101-2 TEL(052)835-7157 [http://www.chukyo-u.ac.jp/research\\_2/library/](http://www.chukyo-u.ac.jp/research_2/library/) 印刷 株式会社一誠社